

追悼の辞

大千軒の連峰から津軽の山々へ続く海峡の風景は少しずつ夏の青さを増し、今年もまた変わりなく皆様の記憶に残るふるさと福島を映し出しております。

浜では、真昆布の収穫、ウニ漁が始まりましたが、イカ漁は、今年も魚影が薄く、朝の「イカ、イカ」の声もあまり聞くことができません。

乳白色の栗の花が満開、天候不順が心配ですが、畑に咲いたジャガイモの花も散り、田んぼの苗も、日に日にその緑を増し豊作が期待されております。

熊出没の話題もあり、いたずらキツネやタヌキとあわせて、シカの食害も多く、悩みの種となっておりますが、山鳥の鳴き声が響き、ツバメが飛び交い、セミやカエルも賑やかに鳴きだし、本州の梅雨にも似た蒸し暑さが続き、故郷・福島の短い夏がはじまりました。

戦後七十八年を越え、今なお、遺骨を収集し、遺族を捜す努力が続けられております。海外戦没者二百四十

万人、半数近くの遺骨は、未だに家族の元へ帰ることなく不明の状態となっており、無念の思いを抱いて亡くなられた方々への遺族の心の痛みを消し去る事は出来ません。

六月二十三日、沖縄市摩文仁の丘で沖縄全戦没者追悼式が行われ、つくば開成国際高校三年生平安名 秋さんの「今、平和は問いかける」と題する「平和の詩」が朗読されました。「礎に刻まれた兄にそっと触れるおばあの涙は私をあの日へといざなう」と始まり「おばあの涙と摩文仁の丘に永遠に灯る平和の火は、平和とは何か、私達にできることは何かを問いかける」と続き、かけがえのない人達を決して失いたくないから、先人達が紡いできた平和を世界に届け、平和を創り沖縄の真心を守っていきたいと綴られておりました。

沖縄八重山地区で戦争マラリアにより、なす術もなく三千六百余名の命が絶たれた状況もテレビで紹介されておりました。戦争に直接参戦した兵士のみならず、戦禍を避けるすべもなく巻き込まれた多くの市井の

人々の尊い生命を奪い、残された多くの人の心をも深く傷つけた戦争の悲惨な事実は、忘れてはならず、けっして繰り返してはならず、脳裏に強く記憶し、後世に伝え続けなければなりません。悲惨・冷酷な事実を忘却し、専守防衛を踏み越え、軍備増強を推し進めようとする傾向も懸念されます。

「核なき世界」の実現を改めて呼びかけ、核廃絶に向けた具体的な「行動計画」を採択した核兵器禁止条約締約国も六十八ヶ国となりましたが、残念ながら、日本は、依然として条約批准を拒絶し続けております。

大戦の苦い経験を経て、唯一の原爆被爆国である事を意識し、平和を希求する日本国民の固い決意を込め、憲法の基本姿勢として、『戦争の放棄』を規定した日本の言動が、重要な意味を持つ状況は続きます。

私どもは、ここに、平和を願い、ひたすら家族の幸せを願いつつ散華され、故郷福島を見守る皆様にあらためて思いを馳せ、恒久平和の実現に努力を傾ける事をお誓いいたします。

御霊の平安をお祈りし、ご遺族の皆様のご多幸を心からご祈念し、哀悼の真を捧げ、追悼の辞といたします。

令和五年七月二十日

福島町議会

議長 溝部 幸基